The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	敗戦前後の日記 ： 一九四五年六月～八月
Author(s)	井本, 稔
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 111-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔日記〕

敗戦前後の日記

——一九四五年六月〜八月——

井本　稔

六月五日（火）神戸市の大阪側の端の方にあった自宅、B29の焼夷弾で簡単に燃えた。翌日になって、妻と次女と三人で、小さな風呂敷一つもっただけで京都にあった父のもとに辿りつく。父が一言だけ、「焼けたか」と言った。

六月七日（木）晴天、九時すぎ登校、すぐ警戒警報が出る。何だかあやしい予感がする。（そしてこの日に東野田という市内にあった阪大工学部が空襲を受け、私の属する応用化学の建物は焼けた。コンクリート建てだったが、窓の側においてあった木材から屋内に火がはいった。私は学校にあった、たった一台のオイルエンジンのついた放水車の班長だったので、大いに活躍した。木造の建物で残ったものは一つもなかった。焼け残った本館のアーケード下に、学校の近くの人たちだったろう、いくつかの屍体がならべてあった——カッコ内は筆者注、以下同じ。）

六月一一日（月）学校へ行く。八浜先生見えた。（私は数え年で三八歳八浜義和教授の下の助教授であった。）守口の東洋紡の科学研究所へ行って部屋を貸してもらえるかどうか聞いてきてくれ、との話で出かける。（守口というのは学校の裏口に駅のあった京阪電車で一〇分ぐらいの所にあった。）中島正所長に案内していただき、一部屋借りることにきめる。学校に帰って先生に報告し、私のグループだけ守口に行くことに決定。

六月一五日（金）船久保先生から補講の件で一二日に来いということだったので毎日学校へ行ったが、先生は一度も来られず。また空襲、B29が大阪市内の東部を中心に三〇〇機、学校へも二〇発ほど落ちたが、もう燃えるものなし放水車もオイル費い果して動かず。放っておいた。

七月二五日（火）京都で警報、九時に解除、それから家を出る。京阪電車、牧野でとまる。B29が美しい青空の中をどんどん飛んで行く。数えただけで一五〇機以上、敵機ながらまことに綺麗だ。草むらの中に寝ころんで見上げる。電車は出たりとまったりする。歩くのもつらいほどになって、午後二時になって守口の研究所に辿りついた。誰もきていない。（あとになって、この日二〇〇〇機が大阪に飛来したと聞いた。）

七月二六日（水）警報出たが、ともかく家を出る。高分子の講義をするつもりで十時半に学校につく。学生来ず。中止する。

七月三一日（月）朝から警戒警報が何度も出て一日中家を出られず。小型機が飛んでいる。日本の飛行機は「その日のための蓄積」ということで全く飛ばない。このごろ Hückel（の量子化学）と Eyring（の Rate Process）の二冊をゆっくり読んでいる。

八月一一日（土）六日の朝、広島にB29の一機が「原子爆弾」なるものを二〜三個おとした。そのために広島はほとんど壊滅し、人の死傷は合計で二五万という。八日夜からソ連がついに戦争にはいった。どのようなことをモメントにして戦争に介入してくるのか、と考えて

いたが、こんなに簡単に、一方的に戦争宣言できるとは予想しなかった。弟夫婦、東京からつく。（あまり広くもない父の家に、父母、京大の理学部にいた四弟、それに妹、私たち夫婦と次女、南方に行っている、もう中尉になっていたかと考えるが、三弟の妻と長男、と大勢で雑居することになったわけである。）

日本人はいま勝つとか負けるとか考えているだけで、全体は生きていないのではないか、客観的にはもう日本人は滅びているのではないか、という気がしてきた。

八月一四日（火）京阪電車の途中でまたB29の空襲にあう。電車から出て、小道に腰をおろして落下弾のするどい音を聞きつづけていて腰がぬける感じ。電車はもう動かないという。困りきっていたら、折よく海軍の人ののっていた自動車をみつける。たのみこんで乗せてもらう。大阪に出て、新京阪（今の阪急京都線）でまわりみちして帰宅した。

八月一五日（水）京阪電車は動いているのかどうか不明。朝、町会長（当時は隣組があって、その上に町会長なる人がいた）から正午に重大放送があるから、ラジオを聞くようにとの達しあり。四弟も学校を休んでいたが、兄弟たち集って、何だろうな、戦争終了かな、いや、いや陛下がみんな自分と一緒に死ぬようにと仰言るのだろう、そのどちらかにきまっている、などと話をする。

二弟の妻だけが堺に行っていて不在だったが、一二時まえに、父を先頭に家中で一応の服装をととのえてラジオのまえに立った。陛下の放送のあることは一一時半にラジオがのべていたのである。東を向いて頭を下げる。君が代の吹奏があって陛下の御声が流れ出てきた。老父が声を押しだすようにして泣いた。相当の長い間だったが、何のことか全く分らなかった。また君が代があって、総理大臣の言葉がつづいた。そこではじめて戦争がすんだことを知った。完全に敗けたことを知った。この偉大な瞬間に家がゆらぐことがなく、時がやっぱり一秒一秒と進むのが、妙な気がした。

三弟の妻と私の妻が泣き出した。こういう空しさというものが、人間の世界にあったのか。みんなで、これからどうなるのだろうな、と話しているうちに、再建という字の美しさ、喜ばしさが感じられる瞬間もあった。

貸家があるというので、兄弟三人で出る。人の顔をみて、みんな泣いたという顔をしているな、と四弟がいう。

家はだめだったが、夕方帰ると父と母とが畠から南瓜（かぼちゃ）をいっぱい持って帰っている。大小五〇ばかりある。今日で軍需産業全部中止の命令があったから盗まれるにきまっている、というわけで全部をもってかえった由。（人手が足りなくなって、耕作ができなくなった農家が畠の一部を貸してくれていたのであろう。）考えてみると、朝の間に警戒警報がちょっと出ただけで、静かな夏の一日であった。水で身体を洗ってねる。

八月一六日（木）陸軍大臣阿南大将が自殺し、内閣総辞職したとラジオが放送した。無責任なんだな、と思う。何をする気もしない。Woods（の Advanced Calculus）の計算問題を一つやってから守口の研究所に出る。生きられるかな、という思いがしきりにする。ドイツでは知識人がベルリンだけでも毎日一〇〇家族が自殺し果てていると新聞に出ていた。収入も食糧もなくなる日がくるかもしれんな、と卒論学

生諸君と話。

八月一七日（金）今日も暑い晴れた朝。ともかく学校に出ると、学部長が私をよんでおられるときく。部長室に出向く。（部長は応用化学の上野誠一教授で、ずっと前に亡くなられたが、すぐれた油脂化学者であった。）先生は「すぐ、大学の拡張原案をつくれ」と例のどもる分りにくい調子で言った。「先生、いま何を言うのです。新聞に大学が閉鎖されるかもしれん、と出てるじゃありませんか」と私は言い出したが、先生はせっかちに抑えてどなった。「ばかなことを言うな。大学の閉鎖なんてあるもんか。航空科や造船科は工合が悪いかもしれん。だから先手をうって、平和的な名前にかえてしまうのだ。これからは化学の時代だ。うちの大学もうんと伸びるようにする。大学が伸びて、はじめて日本も伸びる」と先生は物の怪につかれたみたいに、伸びる、伸びるとくり返した。「そんな金、日本にないでしょう」、「金？　大学の金くらい、どうなっとなる」と大へんな勢いで私は呆れたが、何だか勇気が出てくる感じだった。「その拡張案を文部省にお出しになるのですか、駄目にきまってます」というと、「いや、マックアーサーに出す」と愚かきわまるオチになったが、私は上野先生を心から尊敬した。私も、実際はどうなるかは分らないが、大学の閉鎖のその瞬間まで、あくまで大学にくっついてやろう、それまで勉強をつづけてやろう、と決心しようと思った。これから理工科系の学徒が日本の開発を背負うのだ、と私は大へん昂揚した気持で部長室を出た。（今になって考えても、上野先生の単純さは見事で素晴しかった、と感歎する。）

午後になって守口の研究室にひき返すと、学生の大平君、根来君がまちかまえていたように「大学は閉鎖になるのでしょう？」と言い出した。みんなが心配しているのである。朝のことがあったものだから私は元気であった。「君たちがぐらついてどうなる。来月の末には卒業するのじゃないか。じっとこらえて勉強しとおすことが今いちばん大切なんじゃないか。学徒として少しでも高いところに到達すること以外に、僕たちが日本につくす道はないと思うよ」と言ったが、両君はうんと言わなかった。ともかく故郷も心配だからいっぺん帰ってみる、というのが結論になった。（この年は九月に卒業期がくりあがっていた。夏休みなどというものはもちろんなかった。）

八月一八日（土）守口での昼食は久しぶりでたくさん来て（欠勤していた女の人たちも）、分れの会みたいな妙な気持だった。学校に戻ってから自転車を借りて生活科学研究所（現在の大阪市立衛生研究所）に行く。始終会（同じ年齢ごろの化学者ばかりが集るおしゃべりの会で、いまでも続いている。当時みんな四〇歳前後だった）があり、八谷、大島、庄司さん、幹事の末次さんら九人集った。話はこれからどうなるか、でもちきった。敵の上陸軍は十万くらいだろうというが、大したことないな、とか、川西航空機では残ったアルミニウムでバケツや鍋をもう製造しはじめた、ベークライト工場では毒ガスマスクを中止して、食器のプレスに一昨日から切り替えたよ、とか。大阪商人は転換が早くて全くたのもしい、とみんな希望をもっていた。

五時までに自転車を返す約束なので、途中で出て、半ば焼け野が原のような街を学校へ帰る。冶金教室の前でA先生が、どこかのおじいさんを頼まれたのか、一緒に荷車に古い木やドラム罐をのせておられ

た。自宅に運ばれるのであろう。頭を下げると先生は、私を鼻白んだように見て、「俺はな、百姓をやるんだ、畠もすこし手にはいりそうだ」と話しかけられた。（A先生は私どもの応用化学の五人の教授の一人で、戦争中は「国事奔走教授」として華やかな方であった。）「それはよろしいですね」と答えながら、心の中で反撥した。今日、東久邇宮内閣成立。

八月一九日（日）快晴、上野先生命令の大学拡張案をつくる。造船科を材料工学科、航空科を交通工学科に名称変更し、応用化学科に五講座増設（天然物の厚生利用、染料、高分子材料、香料、分析化学）する。みき（妻）に清書させた。

昨日、二弟が一日がかりで神戸の六甲国民学校まで長女のことを聞きに行ってくれた。（長女は今で言えば小学五年生で、集団疎開で姫路から山奥の方に行っていた。）ちょうど県の校長会議がある当日だったようで、結論がまだ出ていない、という返事だったそうだが、今朝の朝日新聞では、戦災地区の児童はもうしばらく現状のままにする、ということになった由、裏側に（新聞は一枚二ページしかなかったらしい）パーシー牧師という人が「上陸軍は陽気なアメリカ人だから心配は無用だ。上陸して一週間もしたらベースボールの試合を申しこむかもしれぬ、そういう国民気質なのだ」と書いている。良い記事だと思った。「もし負けたら、敵の残虐は目にあまるものがあろう」と言いつづけてきた新聞やラジオや町内会長のことをふと思った。もっとも何が何だか分らない、という気がする。夜、二弟、四弟と三人でEyringの本を読む。

八月二〇日（月）二年生の講義で学校に行く。八人いる。勉強にはりがなくなった、と学生が言う。そんな愚かなことはない、これから僕たちの時代だよ、とあじる。「今朝の新聞では、陛下のお言葉で燈火管制が中止になるそうですね」と学生が言っている。ほんとうならば嬉しいな、と思う。講義をすませて、部長室に行って、昨日つくりあげた大学の拡張案を上野先生に提出。（この後で、この書きものは当然のことだったろうが、どこかに消えた。上野先生は忘れてしまわれたにちがいない。）

そのあと造船科の寺沢教授室に行くと造船の先生方が集ってわいわいやっていた。大学閉鎖は必ず来るのだから何をするかを考えよう。みんなバラバラに分れたら勉強も何もできやせん。だからともかくどこかに部屋を借りよう。研究費が残ってるからそいつを使えばよい。毎日みんなそこへ集って本を読んだり書いたりしようよ。困ったものから先に就職をせわすることにしよう。当分の間の面倒をみるくらいの金は教室にあるはずだ。などと悲しいのか愉快なのか分らないような雰囲気であった。化学だけど私も入れて下さいよ、とたのんで帰る。

正午から十五日に出た大詔奉読式が本館の大講義室であった。上野先生が口の中でごもごもと読んですぐ終る。あと応用化学の教官会食に出る。B先生が「俺は日本人にあいそをつかしたよ。戦争中に、あっ、これは良い話だ、ということを探してばかりいたのだが、特攻隊をのぞいて、何一つなかった。学者も兵隊も会社の人も自分のことばかり考えていたじゃないか。俺だって生活していたんだから、みんなのそういう連中の中におれば、生きられないんだから、俺も利己的だったさ」と大きい声で言われる。教授っていう人たちは何を考えているのかな、と昨日のA先生のことも思い出して、不愉快になる。「ですけど、学者というのは今までより、これからはもっと大切になるか

もしれませんよ」と思い切って言うと、「もう駄目だよ、大学の閉鎖はきまってるんだ」と頭から否定された。

仕事のことでC先生を訪ねる。今日の会食の席上で、部長がみんなを集めて、ただ読んだのはけしからん、学生に対する訓示ぐらいは総長か学部長の名で出すべきだ、とさかんに憤慨しておられたのである。「先生、応用化学教官室の名前で、いまこそ落ちついて学問をやろう、という学生に告げる檄文を貼りだしませんか」と言うと、「檄か……」と先生は話をはぐらかせた。「この大学には自分のことしか考えない教授が多すぎるからな」と返事されただけだった。何のことか分らない。大げさに言えば六月の戦災以来、応用化学は主に助教授以下で保たれている。D先生などは主任教授なのにほとんど学校に顔を出されない。今日も来ておられない。威勢のよかったC先生に「人は、憎まれてもいいと思うのですが、思い切って大学の改革をなさいませんか、とくに人事のことですけど……」と言ってみる。「それはいいかもしれんが、効果ということも考えてみんとなあ、人を怒らせるだけではつまらんからなあ」とたんに神妙な顔付をされた。（戦争がすんで、教授の人たちは大へん気落ちしておられたが、それだけ助教授以下の者たちが気負いたっていたのであろう、私自身も大へん生意気になっていたにちがいない、と思う。）八浜先生は今日は見えなかった。

夜学を五時二〇分から六時四〇分まで。（学校に何かそういう戦時中の施設があったのであろう。）先週まで火薬の講義をしていたのだが止めて、今日から合成樹脂にした。京阪電車に電灯がついていて本が読めた。珍しかった。

八月二一日（火）雨がちっとも降らない。戦争がすんでから電車がかえって混むようになった。満員電車で守口に行く。研究生の宮崎君だけ一人いて学生は一人もいない。今までのテーマを中止しようと決心。考えたのだが、卒業しても学校に残る予定の垣内弘君とベークライトの基礎研究をしようと思う。それで基本試剤をすこし大量に作っておこうと思って、石炭酸とホルマリンの精製をやる。午後おそく学校に行くと八浜先生がおられて何日かぶりでお目にかかった。先生によると四五万人くらい上陸するらしい。沖縄と九州が中華民国、満州、朝鮮、北海道がソ連、本州が米英の受けもちになるようにきまったという。「ともかくそうなったら盛り場には近づかんことだよ」と言われる。何だか、大へんくだらないことを聞いたような気がして意気上らず。

八月二二日（水）朝、守口の研究室に出て昨日のつづきの実験、今朝の新聞では二五日から敵の飛行機がとびはじめ、二六日から米軍進駐の由。いよいよだな、と思う。午後学校に行くと菅田教授が私をさがしている、というので菅田さんの部屋に行く。明日の夜に広島に一緒にたとうという話。広島は予想外に被害が大きく、この目で見ておくのがわれわれの義務だよ、と彼が言った。（菅田さんは私と同じ年の阪大の卒業生だが、電気通信の方の教授になっていた。）大いに考えたが、化学の僕が行っても、ただの野次馬にすぎんなあ、野次馬になるより Eyring の本でも読んだ方がましだ、と思った。僕は行かないと断ると、菅田さんは情けなさそうな顔付をした。夕方おそくなって京橋の駅に出たが、どの電車も超満員でのれない。一時間近くまっても駄目、逆

に天満橋（そこが大阪の起点であった）まで出て、やっと乗ってかえった。

八月二三日（木）雲が出てきて涼しい。新聞に天気予報がのっているのに気がついた。何年ぶりのことか。満員電車の中で、吉川英治が「吾々は思い上っていた」という副題で何かを書いているのを人の新聞から覗きみて、とたんに立腹をおさえかねた。日本をここへ曳っぱってきた責任はああいう愚劣な精神主義的文学者にも大いにあるのだ、日本の精神がいかに偉大であるかを書き、それはそれでいい、しかしそれが世界に冠たるものとわめく必要がどこにあったか、しかも日本の発展は科学の克服にある、精神が科学に負ける道理はない、などと叫びつづけたのは、吉川英治らを頭にする「日本文学者」だったじゃないか。あやまるのなら分るが、われわれは思い上っていた、とは何事かと、内容は分らないが、実に腹立たしかった。

学校で教官会食。そのあと若い人たちと Hückel の二重結合理論のところを読んだ。

八月二四日（金）大へん身体がだるい。プラットホームでもどこでも、しゃがんでばかりいる。長女を迎えに行きたし。

八月二六日（日）台風、東京地方。米軍上陸二日間延期。三一日の停戦協定が米艦上である予定も九月一日に延期の由。

八月二七日（月）講義をすませるとB先生が助教授連を集めて、D先生が学校にちっとも出ないので主任教授をやめてもらうことにしたから、と言った。それは良いことだと思ったが、教官会食には珍しく先生方が全部そろって何もなかったような顔付をしておられる。今朝の新聞に京大の児玉教授が今までの学界を評して指導者一般のつまらなさをかこっておられたことが話題になったが、先生方は「あんなこと分りきっている」と短くやっつけた。自分たちのことも考えられるといいなあと思う。すんでから八浜先生に、D先生のこと、どうなったのですか、と聞くと、「ああ、あれはいままで事情があって休んでいたが、これからはちゃんと主任の仕事をする、ということで済んだよ」と事もなげであった。へえ、と拍子ぬけした。グラマン機が大阪の上空をぐるぐるとまわった。みんな無心の顔付で外へ出て見ていた。

八月二八日（火）新聞によると日本の港湾や飛行場の設備が貧弱すぎて、米軍の五〇万人の上陸に五ヵ月もかかる、という。何だか分らない。日本の軍事力ってそんなものだったのかしらん。学校へ行って、もう守口の研究所をひきあげる算段をしたいと相談しようと考えたが、八浜先生見えず。

八月三一日（金）正子（長女）を迎えに行った。先日、蚊や蚤にくわれて正子がひどく弱っていることを聞いて決心したのである。朝早く出たのに姫路につくと昼すぎになった。車中で弁当を人にもまれながら立ってくった。姫新線のプラットホームで一時間半もまっていると、やっと汽車が出るという。しかし客車ではなく無蓋の貨物車である。それにいっぱい乗る。そして山間を走った。夕立があって炭塵と雨とで頭からまっくろに濡れた。五時ごろ落合につく。集団疎開のお寺はそう遠くなかった。入口をまわった所で子供たちのさわぐ声がした。正子はやせこけていた。恥かしそうに出てくる姿をみたとたんに涙がほろほろと出るのが分った。戦争がはじまってから初めて私は涙を出した。

（いもと　みのる　大阪市大名誉教授）